小林健太郎著 戦国城下町の研究:大明堂 1985年 9月 A5判 352頁 4,800円

中世の世界は、常に古代的世界が崩壊して出来たものか、近世の先がけとして生まれてきたものかよく問われる。それは中世の実像が明確な形で浮びあがってこないためである。古代の条里や帝都をはじめとする計画的プランが歴史地理学的手法で復元され、近世の村や町が現在もその系譜を引きついでいるのを目にすることが出来ることと比べれば、無理のない問いであった。

本書は、このような中で戦国期の町に関する実証 的研究を発表してきた著者の論文を骨子にまとめら れたものである。構成は次のようになっている。

序 章 戦国城下町の歴史地理学的研究の歩み

第一部 国人領主級の城下市町

第二部 戦国大名級の城下市町

第三部 戦国期~近世初頭の地方的中心集落

終 章 戦国期の城下市町と領国の地域構造

序章は戦国期の城下町の研究が鳥羽正雄の論文に端を発し、彼の論文が城郭を中心に考えているが、都市を中心地と見なし、都市の発達と地域構造論との統合を試みている点を高く評価している。その後、戦国期の城下町は、近世の城下町とは景観的にみると、大きく異なって村落的なものではなかったかという、中丸・杉山の問いかけが紹介される。その研究水準を一段とあげたのは松本豊寿で、初期城下町と名付け、町と侍の居住地が、景観的にも機能的にもアンバランスな存在の仕方であったことを紹介する。著者はこの研究史のなかから、戦国期の町の復元が正確に行なわれていないことを指摘し、正確な町の認識のうえで、地域構造の解明に向から必要性を説く。

本論の一部及び二部は,太閤検地の一環として, 土佐一国に実施された『長宗我部地検帳』の分析と 現地調査の結果から得られた土佐の戦国期の城下市 町の復元の結果である。その方法は,検地帳のヤシ キの記載から屋敷の配列形式を推測し,その配列が 該当する場所を,地名,地形,道路,地割と対比し て探し出す。そのうえで配列モデルを修正して,現 地に存在した集落景観を復元するというものである。

1~7章はその方法で、国人領主級の城下市町と して、高岡郡黒岩新町・香美郡山田市・吾川郡弘岡 市が取りあげられ、戦国大名級の城下市町として、 高岡郡高岡市・幡多郡中村市町・安芸郡安芸新町・ 長岡郡岡豊新町が取りあげられている。この7章は 綿密に読めば、資料の分析と現地比定にいかに多く の労苦と細心の配慮が加えられているか感服させら れる部分である。

8章は各々の復元された市町が土佐国内でどのような位置にあったかが考察される。城下市町を国人領主級のものと戦国大名級に区分した理由は、市町の屋敷数とその規模の差である。現代の中心地理論の階層区分の方法を参考に、二つの指標を対数グラフに落として、4つのグループを折出する。(D)村落的景観の強い市町集落の段階にとどまるもの。(C)屋敷が一本の街村に凝集した店舗商業主体の町。(B)100戸前後の町屋敷が集中して、複数の街村を呈する町、(A)近世大名の一国の首都として建設された城下町の市町の部分である。(B)が戦国大名級の市町に、(C)が国人領主級の市町に対応するわけの分布から各々の中心集落としての機能を推察されである。そている。

三部は一部・二部が土佐における戦国期の城下市町の景観の復元とそれに基づく地域構造の解明であったのに対し、他の地域でも同様の視点で戦国期の城下町が分析できることを示されている。9章は、城館に力点が置かれているが、越前の領国の地域構造と戦国大名朝倉氏の城下・一乗谷の復元がなされている。特にこの論文は現在も引き続き行なわれている一乗谷の発掘調査の指針ともなり、著者の歴史地理学的手法の確かさが確認されている。10章は尾張国を事例に、城館と市場及び市町をセットとして戦国期の中心集落と見なし、それをもとに、戦国大名の領国の地域構造を明らかにしている。11章は、近世初頭の萩藩領内の市町を中心地論的見地から論じたものである。

本書によって、初めて戦国期の集落の形態と規模が正確に把握された。その研究結果と方法は関連の学界でも高く評価されており、今後の研究に影響を与える所は大きい。その結果が「地方的中心集落は……町場としての存立基盤は固っておらず、不安定な存在であった。……(その)定着・発展と淘汰の過程をなすものであり……中心集落の立地点が制限されて固定化されてくる段階への移行を示すもので

あった」と中心集落が移ろい易いものであるにせよ, その変遷の一時期の集落景観を復元して,中世独自 の世界を提示した本書によって冒頭の問いは減じる であろう。

二,三の疑問を記させて頂くと,著者の指摘の如く戦国城下町は①領主の居館②家臣団の居住域及び③城下市町から構成される。とくに一部二部では①②はほとんど無視されている。戦国期の中心集落の階層を問題とする時,①②をある程度捨象しなければ得られない結論かもしれない。それは,現代都市を扱った中心地理論も,やはり商業を重視して,他の機能を軽視する点と軌を一にしている。また城館と市町及び市場町をセットして論じた10章の場合は、逆に階層構造は無視せざるを得なかった点に示されている。

第二に城下市町の階層を示す名称が、国人領主、 戦国大名という歴史用語で示されている。地理学的 手法で区分した町を、地城差、時期的変化の大きい 歴史学の用語を借用して呼ぶのは誤解の生まれる危 険を感じさせられる。

用語に関しては、8章の類型化された町の名称が「在町」「地方都市」と記され、前章と不統一なものが見受けられる。

最後に読者への便を考えてみると、本書は著者の 綿密な調査と歴史学の深い素養を背景に書かれてい る。本書の初めから読み進むと大半の読者は迷路に 入ってしまう可能性がある。終章・序章・8章を読 んだうえで、1章から読み始めれば、中心地理論を 念頭においた、大きな構想のもとに、着実な実証を 積み重ねた著者の意図が十分に伝わってくるであろ う。

最後に本書の内容を不十分な理解で評した部分は 紹介者の浅学故とお詫びしたい。 (水田義一)

菊地利夫著:続•新田開発一事例編:古今書院

1986年5月 A5判 758頁 15,000円

歴史地理学研究で、過去、菊地氏の『新田開発(上)、(下)』古今書院(1958)、同書改訂増補版(1977)ほど他分野に影響を与え、かつ評価された書物は少ない。この名著の続編が、このたび約30年の歳月を経て公刊された。事例編と銘打つ本書は、氏が主として30歳代に精力的に実地踏査された新田村の事例研究のうち、再調査、加筆された17編からなっており、総論編にあたる前書の作成過程を知るうえでも、ま

た,氏独自の歴史地理学方法論 (『歴史地理学方法 論』,大明堂,1977)を理解する上でも,非常に貴重 な意義を持つ書物である。まず,本書の構成を次に 示しておこう。

序 章 新田の理論,事例論文の背景と意義

- 第1章 武蔵野の開拓路村とその土地生産力一青 梅街道の開拓路村小川村を中心として一
- 第2章 隠遁武士の見立新田としての新島料十六 島新田
- 第3章 見立新田の開発者に与えられた除地の経 営一信濃国五郎兵衛新田の事例―
- 第4章 滝名川二十七堰懸りの水利慣行と扇状地 の開発過程
- 第5章 信濃国松川扇状地の畑作新田の開発と田 成畑の諸問顒
- 第6章 笠懸野扇状地における代官見立新田とし ての開拓路村とその開発意義
- 第7章 片品川流域における近世山村の二面的性 格の展開
- 第8章 小櫃川上流における畑作村落から水田村 落への転換
- 第9章 九十九里浜のイワシ漁業の豊凶と臨海集 落における新田開発
- 第10章 日川砂漠における柳川新田の開発
- 第11章 干潟八万石の干拓と用水・排水の諸問題
- 第12章 村受干拓としての飯沼新田の諸問題
- 第13章 九十九里平野における塚崎新田の開発と 「池田」の排水権慣行
- 第14章 先進地型町人請負新田としての 大宝 前 (神戸)新田の諸問題
- 第15章 福田沖新開の開発と地域経済の近代化
- 第16章 熊本藩の村受新田としての百町新地・四 百町新地・七百町新地の諸問題
- 第17章 弘前藩の新田開発—小知行派・御蔵派・ 藩営新田
- 付 章 近世全国国郡石高帳の解説(国別・郡別 の石高表)

各章の記載内容については、各々その原論文がすでに各種雑誌に発表され読者の目にとまってきたことと、本書序章に著者自らの手でコンパクトにまとめられていることにより、ここで改めて紹介することは割愛したい。

さて、事例編とはいえ、単なる事例研究の羅列ではなく、上記17編は氏の新田の理論の構想にしたが